

## NEWSLETTER

## ～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター (p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは? (p.1)
- ◆ アクティブラーニング部門活動報告
  - アクティブラーニング型授業モデルの開発 (p.1)
  - 『東京大学のアクティブラーニング』出版 (p.4)
  - ワークショップ開催 (p.5)
- ◆ アクティブラーニング部門とは? (p.7)

## ◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学駒場キャンパス17号館2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングを取り入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みにになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（星 塾）

## ◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（星 塾）

## ◆ アクティブラーニング部門活動報告

2020年度のアクティブラーニング部門の活動を報告します。

## ・ アクティブラーニング型授業モデルの開発

アクティブラーニング部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。2020年度に開講した5つの授業について簡単にご報告します。なお、詳細については、部門 web サイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/classes/>) をご覧ください。

## (1) 全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習：SDGs を学べる授業をつくろう（S セメスター）

「SDGs を学べる授業をつくろう」（担当教員：小原優貴・伊勢坊綾・中村長史）は、SDGs について高校生が効果的に学べる授業を設計してみることで、SDGs についての自分自身の学びを深めることを目的としました。履修生は、SDGs の基本的な知識や授業設計の理論を学んだ後、SDGs に関して特に興味関心を持つものをテーマとし、グループ単位で授業を設計しました。

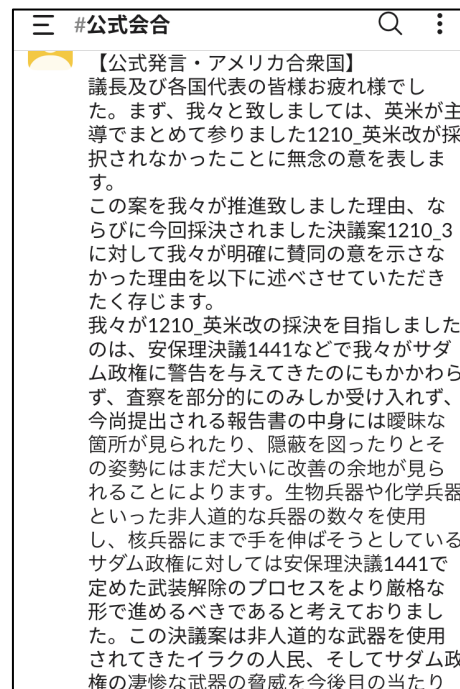
多くの学生が、授業設計についての知識や経験がなかったため、今まで自分たちが受けてきた授業はこのように設計されているのか、と驚いていました。授業の目的を設定し、それを達成するためにどのようなコンテンツにするか、どのような手法を用いるのかを検討しつつ、設計するように伝えました。学生にとっては、授業設計における時間の調整が難しく、時間が足りないと感じたようでしたが、全グループともに50分授業を設計することができました。履修した学生からは、「SDGs に関して十分学んでおく必要があるだけでなく、それを通じて考えたことや伝えたいことを自身の中で明確にしておく必要があることに気が付いた。50分という限られた時間の中で、メッセージとして何を伝えたいのか、どの順番でどの方法で授業を設計するとそのメッセージが最も伝わるのか、など考えていく中で、私自

身のSDGsに関する知識が更に深まっただけでなく、SDGsに対する考えも醸成されたように思った」という声や、「授業はただ教えればよいというわけではなくて、様々な場合に対応できるよう入念に準備をして、生徒がより学びを深める方法を授業前はもちろん授業を展開している時も考え続けなくてはならないということを強く実感した」という感想が聞かれました。(伊勢坊)

## (2)全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習：模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅰ(Sセメスター)

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅰ」(担当教員：星埜守之・中村長史)では、模擬国連(Model United Nations)というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題の解決法を考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合います。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。この点を重視し、授業内では対立の激しい議題・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。

はなかつたかを検討しました。そのうえで、個人の立場から会議をふりかえり、国際社会全体の利益のために、どのような方法があり得たのかを議論しました。2つのふりかえりを踏まえて、受講者は授業外でレポートに取り組みました。



公式発言の例 (Slack に議事録として残されます)



授業の構成

授業は、2部構成としました。第1部「イラク戦争」(第4～8回)では、2003年3月のイラク戦争開戦直前の国連安全保障理事会のシミュレーションを行いました。第4回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第5回から第7回まで会議を行いました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国(査察継続派)、フランス(査察継続派)、ロシア(査察継続派)、英国(即時開戦派)、米国(即時開戦派)の5つの常任理事国に「中間派」のチリ・パキスタンを加えた7ヶ国を設定し、1ヶ国を2・3人で担当しました。現実の会議と異なり決議案が投票にかけられましたが、英米案・仏露案双方に対して対立する常任理事国が拒否権を行使することとなり、廃案となりました。第8回では、まず、このような会議の内容について、担当国の立場からふりかえり、自国の利益をどの程度反映できたか、より適切な政策立案・議論・交渉等

第2部「朝鮮民主主義人民共和国の核開発」では、2017年9月の朝鮮民主主義人民共和国による6度目の核実験後の国連安全保障理事会のシミュレーションを行ないました。第9回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第10回から第11回まで会議を行いました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国(圧力強化消極派)、フランス(圧力強化積極派)、ロシア(消極派)、英国(積極派)、米国(積極派)の5つの常任理事国に日本(積極派)、カザフスタン(消極派)、ウクライナ(積極派)を加えた8ヶ国を設定し、1ヶ国を2・3人で担当しました。こちらは、現実の会議と同様、経済制裁の強化を盛り込んだ決議案が採択される結果となりました。第12回では、イラク戦争の際と同様に、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。

第13回のまとめでは、各自が模擬国連から学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「今回扱われたテーマに関わる、国際関係論における概念(安心供与など)や、国連安保理の仕組み・役割・限界などについて学びました。会議をするにあたり、議題に関わる安保理決議、安保理議事録といった国連文書を初めて見て、それがどういうものなのかを知ることができて良かったです」、「合意形成を目指す中で自然と自身が担当した国だけではなく、他国の目線でも問題を見ることができるようになったことには大変驚きました」、「大使として発言する際には、細かいワードチョイスにまで注意

する必要があったことを学びました」といった感想が寄せられました。オンラインでの開講となりましたが、所期の目的が一定程度達成されたものと安堵しています。(中村)

### (3) 全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習：模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅱ (A セメスター)

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成Ⅱ」(担当教員：星埜守之・中村長史)は、上記Ⅰと同様の狙いのもと、2部構成で開講したものです。

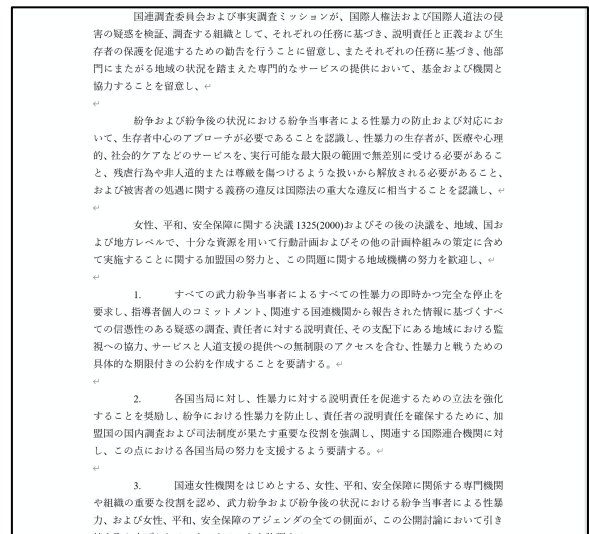
第1部「シリアの人道危機」(第2～7回)では、2010年代を通して続いているシリア人道危機についての国連安全保障理事会のシミュレーションを行いました。第2回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第3回から第6回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国(シリア政府擁護派)、フランス(シリア政府批判派)、ロシア(擁護派)、英国(批判派)、米国(批判派)の5つの常任理事国に「中間派」の南アフリカを加えた6ヶ国を設定し、1ヶ国を1・2人で担当しました。現実の会議と異なり、棄権はあつたものの反対票が投じられることはなく、決議案が採択されることとなりました。第7回では、Sセメスターと同様に、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。



授業の構成

第2部「女性、平和、安全保障」(第8～12回)では、「テーマ別会合」(国連安全保障理事会では、シリアのような特定の事態のみならず、「テーマ別会合」と呼ばれる一般的な議題も扱われます)の一つである「女性、平和、安全保障」のシミュレーションを行いました。第8回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第9回から第11回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国(現実世界では棄権)、フランス(賛成)、ロシア(棄権)、英国(賛成)、米国(賛成)の5つの常任理事国にインドネシア(賛成)、南アフリカ(賛成)を加えた7ヶ国を設定し、1ヶ国を1人で担当しました。多様な文化・宗教・利害を持つ国々の間でリプロダクティブヘルス/ライツや、安保理で人権問題を話し合うことの是非等をめぐって議論・交渉が繰り返されましたが、現実世界とは異なり、全会一致で決議案が採択され

る結果となりました。第12回では、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。



採択された決議案の一部

第13回のまとめでは、各自が模擬国連から学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「自分の担当国だけではなく他国についても調べないと、交渉材料がなく、議論を優位に進めることができないので、自然と勉強した」、「妥協点を探していくこと、また、どの部分を妥協して、どの部分を妥協しないかを考えるために、行動において優先順位が重要であることが学べた」といった感想が寄せられました。所期の目的が一定程度達成されたものと安堵しました。一方、2019年度も本授業を受けた学生からは、オンラインで模擬国連の会議を行なう難しさについても言及があり、オンライン授業が継続する2021年度に向けて、引き続き試行錯誤が必要だと感じた次第です。(中村)

### (4) 全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習：国際紛争ケースブックをつくらう (A セメスター)

「国際紛争ケースブックをつくらう」(担当教員：星埜守之・中村長史)では、複数の国際紛争の経緯や構図、原因等についてグループで調査し、最終的にケースブックを作成することを目指しました。その過程で、ある国際紛争に対する見方は決して一様ではないことに気づき、できる限り客観的に各紛争を捉えるための方法を習得してほしいと考えました。担当する紛争の5W1H、すなわち主体(who)、争点(why)、時期区分(when)、民族・宗教・政治体制・経済状況(what)、当事者・第三者の行動(what&how)について正確に理解するために複数の文献・資料にあたって丁寧に情報収集するのはもちろんのこと、他の紛争を担当するクラスメイトとの意見交換を通じて、紛争間の関係性や前例が後例に与える影響についても学ぶことを期待しました。

授業は、2部構成としました。第1部「ケースブックの改訂」（第2～7回）では、いきなりケースブックをゼロから作ることは難しいので、まずは練習として、教員の方で概略のみを記したものを作り、その改訂から始めることにしました（今年度が初めての開講のため、教員の方で「たたき台」を準備したわけですが、次年度以降は、前年度までの授業で作成されたものを改訂していくことを予定しています）。ソマリア、ルワンダ、ボスニア、アフガニスタン、リビアの5つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TAからのフィードバックを繰り返し、ケースブックの改訂を進めていきました。第7回では、グループごとに、その最終成果を報告しました。

なお、第3回には、国際連合政務・平和構築局 政務官の高橋尚子氏がゲスト講師としてお越しくださり、国連事務局における紛争の分析方法について紹介してくださいました。国連に研究・キャリア上の関心を有する学生が多くいることもあり、活発な質疑応答がなされました。

<p>【第1部 ケースブックづくりから学ぶこと】</p> <p>第1回(9/28)ガイダンス</p>	<p>【第2-2部 ケースブックの作成】</p> <p>第8回(11/30)作成作業・中間報告①</p> <p>第9回(12/7)作成作業・中間報告②</p> <p>第10回(12/14)作成作業・中間報告③</p> <p>第11回(12/21)作成作業・中間報告④</p> <p>第12回(1/4)作成作業・最終報告</p>
<p>【第2-1部 ケースブックの改訂】</p> <p>第2回(10/5)改訂作業・中間報告①</p> <p>第3回(10/12)改訂作業・中間報告②</p> <p>第4回(10/19)改訂作業・中間報告③</p> <p>第5回(10/26)改訂作業・中間報告④</p> <p>第6回(11/2)改訂作業・中間報告⑤</p> <p>第7回(11/9)作成作業・最終報告</p>	<p>【第1部 ケースブックづくりから学んだこと】</p> <p>第13回(1/7)総括</p>

授業の構成

第2部「ケースブックの作成」（第8～12回）では、改訂作業で学んだことを踏まえて、ケースブックをゼロから作る段階へと入っていきました。コンボ、イラク、シリア、イエメンの4つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TAからのフィードバックを繰り返し、その最終成果を第12回で報告しました。改訂作業の段階に比べて、事例（紛争）間の関係にも目を向けるグループが多くなるなど、確かな成長が感じられました。

第13回のおまとめでは、各自がケースブックづくりから学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「紛争の記述というのは、あらゆる点において政治性を伴うものだという点を痛感しました。犠牲者数、取り上げるアクターの扱いなどに関しても、書き手の価値観が図らずも反映されることは否めないように思います。したがって、報道のみならず学術論文などから情報を得る際にも常に上記の点に留意しながら分析を心掛けたいと考えています」、「他者が読むことを想定している点では論文と似ているものの、一読して紛争構図が掴めるように要点に絞って記述する作業はむしろかなりの労力を要しますが、だからこそ情報収集及び取捨選択の方法に関しては一定のスキルが身についたように感じます」、「他班のケースブックとの関連を意識す

ることにより、自ずと自分が記述している紛争へのアナロジーを見出したり、前例の後例への影響を発見することができたりしたため、大きな学習効果があったと思います」といった感想が寄せられました。初めての開講となりましたが、所期の目的が一定程度達成されたものと安堵するとともに、2021年度に向けてさらなる改善を図っていきたいと考えています。（中村）

#### (5)全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習：働きがいやジェンダーを考える（Aセメスター）

「働きがいやジェンダーを考える」（担当教員：星埜守之・伊勢坊綾）では、学生の興味関心に基づき、働きがい、働く上でのジェンダーの問題に関する論文や文献を輪読し、ディスカッションを行いました。また、購読文献『「育休世代」のジレンマ：女性活用はなぜ失敗するのか？』の著者である中野円佳氏（東京大学教育学研究科博士課程）、男性学／男性性研究について川口遼氏（東京都立大学子ども・若者貧困研究センター特任助教）、研究者のワーク・ライフ・バランスについて小原優貴氏（お茶の水女子大学/日本学術振興会・特別研究員

(RPD)）に講演していただき、活発なディスカッションが行われました。

この授業は、これから社会に出ていく学生にとって、自分自身の問題だと認識し、対峙していくこととなる「働きがいやジェンダー」に関して、文献の内容理解だけでなく、ディスカッションを通じ、自身と異なる考えを持つ他者から学び、自分の考えを発展させることを目標にしました。オンラインでの実施となり、画面オフの状態で履修生各自の考えについてのディスカッションをどう活発にするかが課題でした。ディスカッションの論点を多めに提示し、その中でディスカッションが活発だったことについて報告してもらうなどの工夫をしました。また、発表が一部の人に固定化されないよう発表の頻度をチェックし、多くの学生に多様な意見を出してもらうよう、心掛けました。一方で、1年生から院生までという幅広い履修生であったため、既有知識に差があるということがわかりました。授業後の振り返りシートでわからないことを質問してくれた学生には、Slackを使って別途対応するように心がけました。対面を希望する学生がいる一方、「センシティブな話も多いからこそ、オンラインで画面オフは有難い」という声もありました。オンラインだからこそより学びやすいということもあると、自分自身、勉強になりました。（伊勢坊）

#### ・『東京大学のアクティブラーニング』出版

東京大学教養教育高度化機構アクティブラーニング部門編『東京大学のアクティブラーニング—教室・オンラインでの授業実施と支援』（東京大学出版会、2021年）という書籍を刊行しました。

本書は、2部構成となっています。第1部「アクティブラーニング型授業」（第1～9章）では、本学におけるアクティブラーニング型授業の具体例につ

て、人文・社会科学、自然科学、教育手法開発の各分野から3授業ずつとりあげています。各授業における工夫や授業改善の軌跡を、授業担当教員自身で紹介しています。



第2部「アクティブラーニング型授業を支える取り組み」（第10～12章）では、ティーチング・アシスタント（TA）による授業支援、アクティブラーニング部門スタッフによる授業支援、アクティブラーニング解説教材作成といった取り組みをとりあげています。各取り組みにおける試行錯誤について、支援者・作成者自身が座談会形式で紹介しています。オンライン授業に関する記述も多くありますので、是非ご覧ください。（中村）

### ・ワークショップ開催

アクティブラーニング部門では、学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画しています。2020年度に開催した3つのワークショップについて簡単にご報告します。なお、詳細については、部門 web サイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event/>) をご覧ください。

#### (1)「第2回 模擬国連ワークショップ：授業への効果的導入のために」（2020年9月19日）

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成」を踏まえて開催したものです。学内外の大学・高校教員を対象として2019年度から実施しており、今回が2回目、初のオンライン開催となりましたが、40名の参加者が画面越しに集いました。ワークショップは2部構成としました。セッション1「模擬国連のできること・できないこと」では、教養学部の授業での実践を踏まえ、①教員が模擬国連の導入目的を明確化すること、②導入の意義を受講者に伝えること、③目的に照らしてより適切な教育手法がある場合には、模擬国連にこだわらずにそちらを選ぶこと、④オンライン授業であっても工夫次第で一定の臨場感をもって模擬国連の会議を実施できることなどを、授業担当教員（中村長史）と受講者代表（北村優成＝法学部3年、八尾佳凜＝教養学部2年）からお伝えしました。参加者の方との質疑応答も含め、「どのような学生・生徒に育ってほしいのか」という教育理念がまずあるべきで、模擬国連はあくまでも一手段であることについて考えを深める機会となりました。



授業担当教員・受講者代表の説明（セッション1）

セッション2「社会で役立つ模擬国連」では、第1部で確認した「どのような学生・生徒に育ってほしいのか」という教育理念の重要性を踏まえ、本学の教養学部・法学部生時代に模擬国連を経験し、現在は実際の外交に関わっていらっしゃる外務省の山崎茉莉亜・課長補佐と授業担当教員との対談を行いました。①会議での外交交渉、②会議以外の外交に関するお仕事、③それらと模擬国連との関係、といった点について、参加者の方との質疑応答もまじえて進めました。



外務省職員と授業担当教員の対談（セッション2）

参加者の方々からは、「セッション1とセッション2両方があることで、参加者自身が、『授業としての模擬国連』と『模擬国連から得られる経験・知見の現実的適用』について学ぶことができた」、「実際に授業を受けている学生の方々のお話も聴けて、導入した場合のイメージが湧きやすかったです」、「現役の外交官や、模擬国連を授業で実践されている講師の生の話を聞くことのできたことが、模擬国連を自身で企画する際の具体的なイメージの助けとなった」、「模擬国連を導入するきっかけをいただきました」といった感想が寄せられました。初めてのオンライン開催となりましたが、参加してくださった方々に深く感謝するとともに、所期の目的が一定程度達成されたものと安堵しています。2021年度に開催予定の第3回に向けて、さらなる改善を図っていきたいと考えています。

なお、ワークショップ当日の様子は、「東大TV」から視聴していただけますので（セッション1：<https://today.tv/contents-list/2020FY/MUN2/session-1>、セッション2：<https://today.tv/contents-list/2020FY/MUN2/session-2>）、是非ご覧ください。（中村）

## (2)「東大生がつくるSDGsの授業」(2020年11月28日、12月13日)

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「SDGsを学べる授業をつくらう」を踏まえて開催したものです。授業の中で特に優れた授業案を設計した4グループの学生たちが、高校生を対象とした授業をオンライン上で実施しました。2日間で計55名の高校生が参加しました。

11月28日には、授業担当教員からの趣旨説明に続いて、SDGsの17の目標を包括的に扱う授業「明日から自分たちにできること」(小林雄香=新領域創成科学研究科修士1年、上岡稀生子=教養学部2年)と、目標7(エネルギー)を集中的に扱う授業「日本の再エネを“正しく”知ろう」(屋田春希=総合文化研究科修士1年、坪井友里香=文学部4年)が実施されました。12月13日には、17の目標を包括的に扱う授業「SDGsの“s”の意味を考えよう」(堤文音=教養学部2年)と、目標5(ジェンダー)を扱う授業「“あたりまえ”を疑え!」(石澤由佳=教養学部4年、三輪千恵=教養学部3年、鎌田康生=教養学部2年)が実施されました。いずれの授業においても、参加した高校生にとって単なる知識習得にとどまらず、意見交換を通して深く考えてもらうための発問やグループワークがとりいれられていたように思われます。

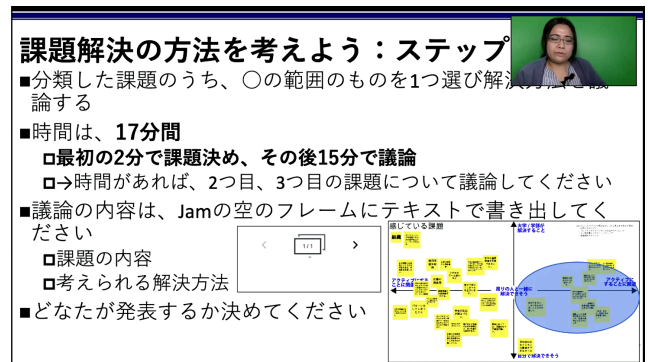
授業を実施した学生からは、「50分という限られた時間の中で、メッセージとして何を伝えたいのか、どの順番でどの方法で授業を設計するとそのメッセージが最も伝わるのか、など考えていく中で、私自身のSDGsに関する知識が更に深まっただけでなく、SDGsに対する考えも醸成されたように思った」、「こちらの伝えたいことを掘み取ろうとする意識が伝わってきて、こちらも伝えようという思いが一層強くなり、とても刺激的で有意義な時間を経験させてもらうことができました。準備の時間はとてもかかりましたが、それ以上のものを得られる貴重な機会だったと思います」といった感想が寄せられました。授業担当教員としては、他者に教えることが自身の学びになるという本授業・ワークショップのコンセプトが一定程度達成されたようで何よりだと考えています。参加して下さった高校生の方々、見学にいらした先生方に深く感謝する次第です。

オンラインでの実施となったことについては、やりやすさを感じた学生もやりづらさを感じた学生もいました。2021年度もオンラインでの実施が想定されるため、オンラインならではの授業の進め方についても、授業を実施する学生に伝えていきたいと考えています。(中村)

## (3)「オンラインでこそアクティブラーニング:1年間のふりかえりと課題解決のヒント」(2021年3月10日)

本ワークショップは、東大で授業を担当されている先生方を対象に、1年間のふり返し、授業でうまくできたことや課題を思い出して共有し、さらにオンラ

イン授業をアクティブにすることについて検討することを目的として開催したものです。当日は17名の方が参加しました。



ワークショップの様子

趣旨説明やグループでの自己紹介後、オンライン授業の課題を、Jamboardを使って一人ずつ書き出し、グループごとに共有しました。学生のネット環境や試験の実施方法、グループディスカッション(ブレイクアウトルーム)の状況把握など、様々な課題が共有されました。続いて、ミニレクチャでは、アクティブラーニングの定義や、「アクティブにすること」の手がかりとしてエンゲージメントという概念を紹介し、目指す方向性の認識をあわせました。その後、先ほど挙げられた課題を分類しました。個人や周囲の手助けがあれば解決でき、かつ「アクティブにすること」に関連する課題の中から、グループごとに課題を選択して解決方法について議論し、その内容を全体で共有しました。最後に、オンライン授業をアクティブにするための課題解決のヒントとして、学生の反応を得る方法や授業設計、オンライン環境の活用についてミニレクチャを行い、ワークショップを終えました。

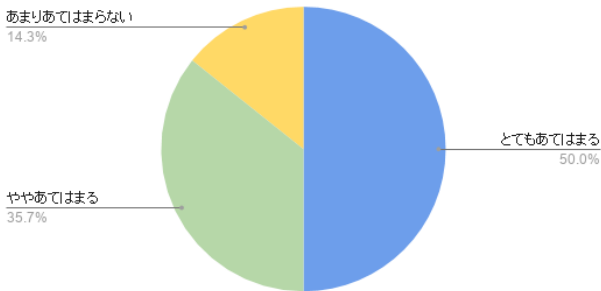


グループでの課題の共有と分類、議論の内容を発表する参加者(画像を加工しています)

参加者からは、「同じ問題に悩んでいることがわかってほっとした」や「いいアイデアをもらった」といった感想が聞かれました。オンライン授業の運営は孤独になりがちです。本ワークショップでの課題共有や議論がそれを解消する一つの機会になったのではないのでしょうか。ワークショップ後のアンケートでは、「本ワークショップに満足されまし

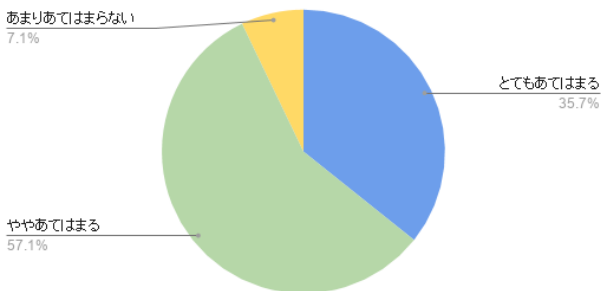
たか」、「授業のふり返りに役立った」、「2021年度の授業準備・実施に向けて役立つものだった」、「本ワークショップへの参加を周りの教員に勧めたいか」という質問に対しては全員の方が「とてもあてはまる」もしくは「ややあてはまる」のいずれかを回答されました（とてもあてはまる／ややあてはまる／あまりあてはまらない／まったくあてはまらないの選択肢から1つ選択）。

本ワークショップによって、2021年度の授業をアクティブにすることができそうですか



ワークショップ後のアンケートの結果  
Q. 2021年度の授業をアクティブにすることができそうですか

本ワークショップによって、2021年度の授業への不安が軽減されましたか



ワークショップ後のアンケートの結果  
Q. 2021年度の授業への不安が軽減されましたか

これらのことから、本ワークショップの目的はある程度達成されたと考えられます。一方で、アクティブにすることができそうという見込みや不安の軽減については「あまりあてはまらない」を選んだ参加者もいました。今後は、アンケートの結果を踏まえてワークショップを企画していきたいと考えています。（中澤）

## ◆ 今後の活動予定

2021年度もオンライン授業が継続されます。オンライン授業でのアクティブラーニングに資する情報発信、授業開講を通じた授業モデルの開発と試行、ワークショップなどを行っていく予定です。

オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト(<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>)に掲載しています。これまでに制作した冊子「+15」、「+15 実践

編」、ニュースレターのバックナンバーをダウンロードすることもできます。ぜひ一度、訪れてみてください。

## ◆ アクティブラーニング部門とは？

アクティブラーニング部門は学部教育を教育学の視点から支援することを目的として、2010年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして2007-2009年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「ICTを活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築-」を継承し、発展させています。また、全国の教育機関や教育関連の企業から年間30件余の見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

(奥付)

- 発行年月日：2021年6月14日
- 発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門  
星埜守之・中澤明子・伊勢坊綾・中村長史
- 連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Webサイト：<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>